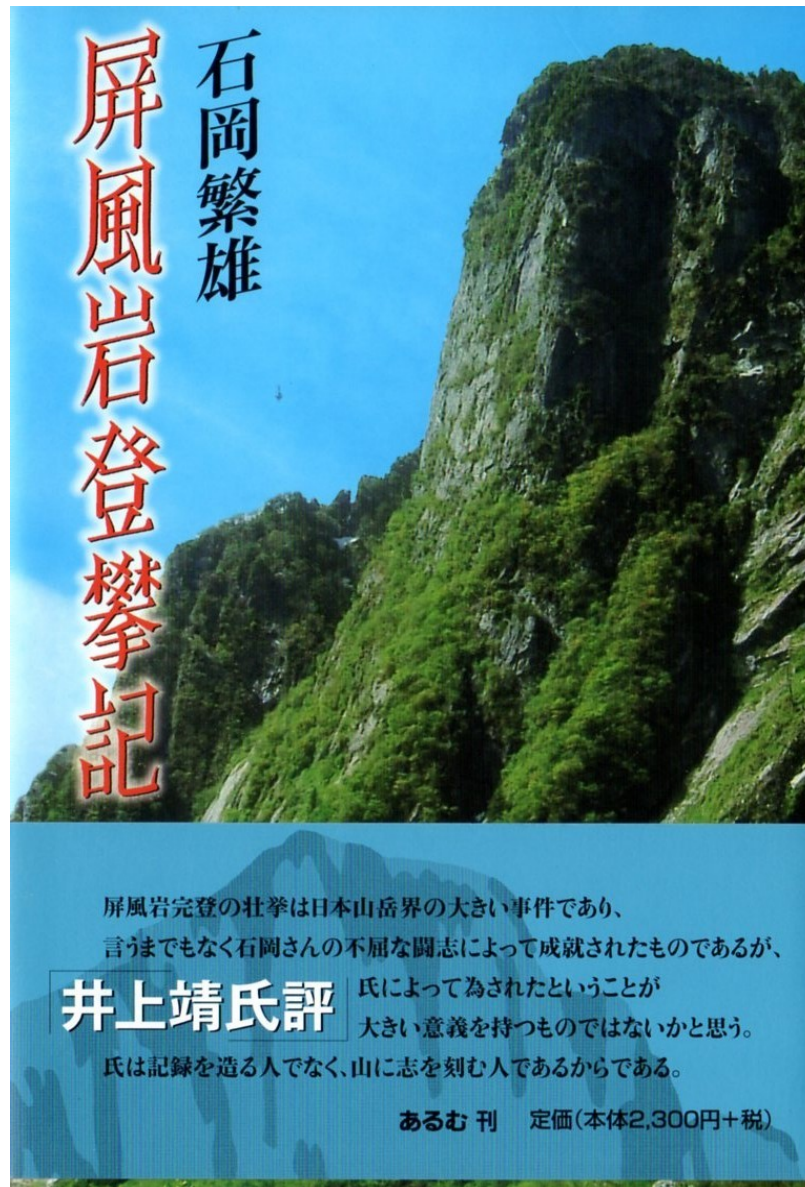




ある岩稜会員の話（昭和二十六年）

朝鮮は、昭和二十三年までは日本であったが、その年のある日、とつぜんもとの外国となった。それと同時に、私たちのこよなき山仲間、高瀬治男は在日外国人となった。以下そのことに関連して、私たちの仲間に発生した小さな事件と、その後、彼が世にも珍しい記録を立てたことなどを語ってみよう。

彼は、昭和二十二年四月、神戸中学（二十三年に神戸高校となる）へ入学し、山岳部に入り、苦しい家計の中から山の道具をそろえ、すべての合宿に参加した。体力、技術、人柄の三拍子がそろい、誰からも愛される山男であった。

さて、昭和二十五年十月、第五回国民体育大会を愛知県が引き受けることになった。これは本題に関係があるので、アウトラインを述べておきたい。

国体種目のうち登山部門については、愛知県に適当な山がないこと、愛知県の山仲間にとって最も親しいのは鈴鹿の山であるといった理由から、鈴鹿山脈で行なわれることになり、その仕事は主として三重県が引き受けることになった。けっきょく、私たち三重県の山関係者の仕事となった。また私

などが主張したこともあって、国体登山種目の中に御在所岳での岩登りを含めることになった。しかし、事故発生率の大きい岩登りを国体種目に含めることは初めての試みであり、三重県当局としては万一の事故を考え頭が痛かった。

しかし私が、岩登りとしては邪道と思われるような安全本位の計画を立てて説明したので、県当局も安心し、その計画実現のために必要なザイル五百メートル、ハーケン二百本、カラビナ百個などを購入してくれた（朋文堂発行の「山」一一号を参照されたい）。

そして、私たちは夏休み約一カ月を御在所の岩場に山賊のように立てこもって、新しく選出した十のコースの安全工作に努力した。また、ルート説明書を作るために、御在所の岩場を構成する岩壁・尾根・谷等に名称をつけた。それが現在も使われている。

岩稜会の連中は、このときばかりは大いばりで山登りができるので、それこそ水を得た魚のように嬉々として働いていた。

さて、私たちは用意万端ととのえてその日を待ちうけた。しかし、岩登りの当日は朝から大雨となり、岩登りは中止され、選手一同は水が滝のように流れ落ちる岩壁をガスの切れ目に仰ぎながら、岩壁の下を歩いたにすぎなかった。

けっきょく、私たちの苦心は水の泡となったが、つぎのできごとから安全工作の効果は認められた。

開会式当日、行事に出席せず、こっそり岩場に取りついたパーティが安全工作を無視して登り、墜落して骨折した。ところが、国体行事終了の翌日は快晴となったので、オープン行事として岩登りを

希望する有志を岩場に案内した。このときは、一の壁第三ルートに取りついたパーティのトップが、俵をけとばしたように墜落し、下から見上げていた私たちを仰天させたが、こちらの指示通り安全工作を実施していたので、事なきをえた。

話は後もどりするが、そのときの国体では、登山関係の選手は高等学校の生徒のみに制限されることが決まり、各都道府県から三名ずつ選手が選出された。

地元の三重県からは、三名とも神戸高校から選出された。私としては、選手が一校に集中することは国体登山の趣旨に反するといつて反対したが、他に適当な者がなく、そういうことになってしまった。

選手に決まった中道、高瀬、三林の三名は、校長からも激励され、感激し、危険を伴う岩場の安全工作にも涙ぐましいほどよく働いた。

国体があと一カ月後にせまったある日、私はとつぜん、かつて教官室でずっといっしょに机をならべていた神戸高校の教頭、M先生の来訪を受けた（私は当時、神戸高校を退職し、自家営業をしていた）。M先生は、

「栄誉ある国体の選手に本校から三名も参加できたことは、校長はじめ教職員一同まことに鼻が高い」と述べられたが、そのあとで、急に深刻な顔つきになって、

「じつは、このことで困った事態が起き、校長はじめ頭を痛めているのです。そこであなたに相談しようということになり、私が出向いたわけです。三日前、校長宛の投書があつたのですが、それに

は、『登山関係の国体選手三名のうち高瀬治男は日本人ではない。国体はいうまでもなく日本の国民の大会であるので、高瀬には資格がない。校長の責任において高瀬を他の者に交代させよ』という意味のことが記されていたのです。三名の選手のことはもちろん発表済みで、県でもそのように登録されているわけですが、これはどうしたものでしょうか」

といわれた。私は選手選考のとき、それには少しも気づかなかつた。筋道はたしかにその通りだ。しかし、喜々として準備にはげんでいる高瀬を交代させるなどということはぜつたいにできない。それかといつて校長に迷惑をかけることもできない。しばし考えたのち、M先生に、

「私は、国体の実行委員および三重県の選手選考委員の資格で、神戸高校の校長のご意向は確かに受けたまわりました。このことを、しかるべきところに諮って決定し、その結果をお伝えします。しかし、お伝えするまでは現在の選手に変更がないということに進めていただきたい。いずれにしましても、この問題についての今後の責任は、はつきりと私にありますので、そのことを校長先生にお伝えください」

と答え、M先生も了承して帰られた。しかし、妻が隣室でこのヒソヒソ話に聞き耳を立てていて、帰られるとすぐに、

「たいへんなことになったがどうするつもりなの」という。私は、

「もちろん誰にも相談しないでこのまま放っておく。これ以上問題になることはないと思う。万一どうしても問題になるようであれば、高瀬を石岡家の養子にする。もちろん高瀬がどうかかわからな

いが、とにかく今としてはそれ以外に方法はないと思う。お前は不服かもしれないが承知してもらいたい。この話はおやじ、おふくろはもちろん、誰にもいわないほうがよい」といい、妻もやむをえないという顔つきだった。十日ほど経って私は、電車の中でたまたまM先生と出会った。M先生は、私が誰にも相談するはずがないことをすでに感づいていられたようであったが、

「どうされますか」

とささやかれた。私は、

「いや、万一問題になれば、私の養子にするまでです。家内も了解してくれました」と笑顔で答えた。M先生はうなずいておられた。

もちろんこの事件はその後何も起こらず、国体はぶじ終了したわけである。つぎは、この高瀬が世にも珍しい墜落の記録を作った話である。

昭和二十六年の夏がせまり、恒例の穂高合宿をどういう形でやるかという検討をし始めた。当時、私ども岩稜会は、屏風岩に続いて明神岳の夏の合宿を終り、いくつかの初登攀に成功し、意気まことに盛んであった。しかし、私自身は屏風岩以来急にバランスが悪くなり、とくに体重が増しつづいたので、かつて苦もなく登れた場所がつぎからつぎへと登れなくなっていた。せっかく体得した技術が私から離れてゆき、もうあの場所も登れないかもしれないなどと考えていることはさびしい限りだった。したがって、私はこれからの登攀に加わることはなく、いわゆるテント追出し係となってい

た。

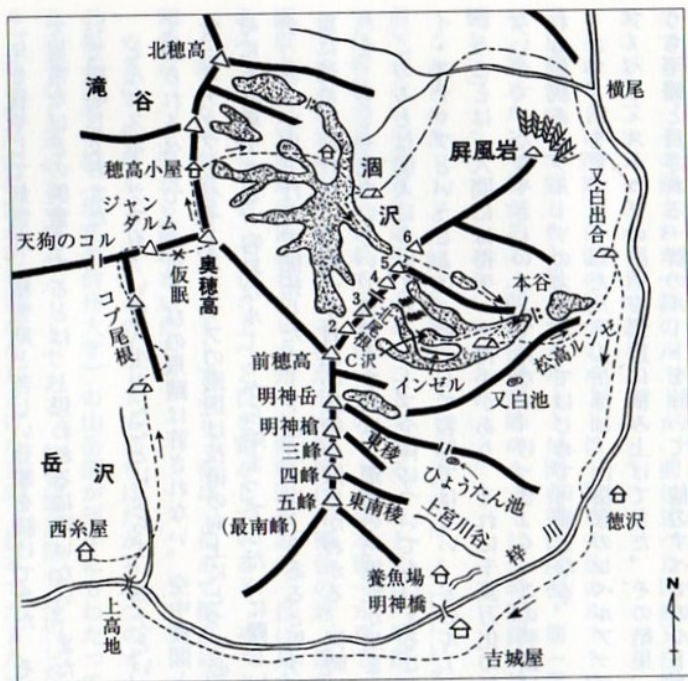
二十六年という年は、三重県の指導者講習会という、主として高校の体育の先生方を対象とした技術講習を穂高湊沢でやることになっていたので、いずれにしても湊沢へ入らねばならないこととなった。しかし、上高地から横尾、湊沢というのでは変りばえがしないというので、上高地、岳沢、コブ



コブの下降 (S26.7.24)

尾根からジャンダルム、奥穂を越して湊沢へ入るという計画を立てた。

七月二十三日はコブ尾根の下でテントを張った。つぎの日、約二十名、二週間分の食糧、登攀道具を背おって、長蛇の隊列でもってコブを越した。ところが、コブの下降ではザックを一つひとつザイルでつるしておろしたので、ここだけで五時間ほどかかり、ジャンダルムを越したあた



---昭和26年7月23日から7月30日までに
著者が歩いた道
---濁沢のテントを又白出合に移したコース

しぶりに異常なほど興奮していた。
しかし、読者の方々は、それはおかしいではないかといふかられるかもしれない。つまり、北尾根四峰又白側の岩壁は、当時積雪期こそ手つかずであったが、無雪期には十年も前に三本のルート（甲南、松高、新村）が登攀済みである（写真18）。一方、岩稜会は屏風岩の中央カンテの初登攀という技術的に最高の仕事を終っている。また明神山群というそれまでほとんど未開拓で、しかも登山界でも恐れられていた場所を、

りで暗くなり、ナイフリッジの手前の尾根の上で一夜を明かすことになった。テントも寝袋も持っていたが、ビバークの練習ということで、それらを使わず各自岩の凹みを見つけて眠った。
この三千メートルでの大部隊の夜営は私の生涯の中でも、もつともすばらしい思い出の一つである。満天の星の中に長々と横たわる銀河、眼前にそそり立つジャンダルムの海坊主のような黒い影、ときおり四方の山々を浮き上がらせる遠雷のきらめき、山男の冥利を痛感させる一夜であった。
翌日は早朝出発、奥穂高の頂上で日の出を迎え、穂高小屋を経て濁沢池の平に下り、根拠地を設けた。この日夕方、三重県の講習会参加者約三十名が上高地から横尾谷を経てやってきた。九州の上岡さん、岩稜会の北川さん、私の妻に六歳の長女といった女性群も、それについてきて、テント地は急にはなやかになった。夜は花火を上げた。花火が一つまた一つと満天の星の中へもぐり込むようにして火花を散らす。そのたびに女性の嬌声を混じえた喚声がひびきわたる。
その翌日、岩稜会は滝谷に集中した。三重県の講習生は私が案内してジャンダルムを往復した。女性群も同行した。快晴が続く、すべては順調そのもので、その翌日に事件が起きようなどとは夢にも思えなかった。
その夜、つまり七月二十八日の夜、赤嶺（神戸高校の山岳部長）、石原（兄）、松田、私といったわは幹部連が、私のテントに集まって明日の計画を相談した。北尾根・四峰又白側正面岩壁の登攀が協議の中心であった。これはもちろん今夏の計画の最大の目標であり、同時に岩稜会のかねてからの宿題であった。いやそれよりも、私が戦前から描き続けてきた夢の対象であった。その検討で私は久

二年を費やして無雪期、積雪期と苦しい登攀を続けてきた。それが今さら四峰又白側正面岩壁の登攀で異常なほどの興奮をするとは、と思われるに違いない。またしても本題から離れるが、この点について説明しておきたい。

どんなスポーツでも、いや人生なにごとによらず、向上というものは一歩一歩順序正しく積み重ねて得られるべきで、一足とびの飛躍は許されない。空中楼阁となりかねないからである。登山の場合、ステップ・バイ・ステップの原則は技術の向上にとって必要であるばかりでなく、遭難防止のためにも必要である。容易なルートから始まってしだいに難しいルートに進む。たとえば穂高岳の場合、先人が血と汗とで開拓したルートは五十以上もあると思うが、それらのルートを易から難へと慎重に進めてゆけば、遭難せず自己の技術の限界がわかる。同時に技術の向上も可能なのである。それを、もしも先をいそいで飛躍をすれば、遭難の可能性が生まれる。

このことは個人についてもグループ全体についてもいえることである。しかし、このステップ・バイ・ステップということは、決して容易ではない。どのルートが易しく、どのルートが難しいかということは、人間には得手、不得手があり、それに千変万化の気象条件までも加味して考えねばならないので、なまやさしいことではない。けっきょく、この判断は個人ではむりで、グループの力、それも伝統あるグループの力があつてはじめて可能となる。

さて、私を育ててくれた八高山岳部は、山岳部のレベルアップのため、何年もかかってこのステップ・バイ・ステップの原則を慎重に積み上げてきた。その結果、昭和十五年頃には、穂高のルートのうち至難と目される一群のルートを除いて、他のすべてのルートを自己の技術の範囲内に収めていた

のである。その残された一群のルートが、前に述べた四峰又白側の三つのルートと屏風岩第一ルンゼおよび第二ルンゼのルートである。

それならば四峰又白側の三つのルートは、穂高の他のルートに比べてどう違うのであろうか。四峰又白側について難しいと目されるルートは滝谷第四尾根、第一尾根、クラック尾根、屏風岩第一ルンゼ、第二ルンゼ等がある（明神岳最南峰のルートは当時記録がほとんどなく、他のルートとの比較が難しい）。

これらのルートと四峰又白側のルートとの差は、一口にいえば、前者にはオーバーハング（逆傾斜）がないが後者にはそれがあることである。たとえば、甲南ルートはこれらの三つのルートのうちでは容易であるといわれているが、このルートは本書一六頁で、

「ずっと足元の谷に消えている壮烈な大絶壁は、褐色の岩、黒色の岩を交錯させて、いたるところ垂直以上で、岩肌が赤色にピカピカ光った節理面をみせ、目に見えるところだけでも百メートル以上はあろう。上から下へ、下から上へと目を動かしていると、ぞっと寒気がしてくる」と

と記したその岩壁を登るルートである。私は、初めて穂高に入った年に見たあの岩壁のものすごい印象は、一生頭から離れないだろう。

つぎに、松高ルートは、そのルートに立ちはだかる二つのオーバーハングを乗り越すために、地元の松本高等学校（現在の信州大学）の山岳部が何年にもわたって、地元の名譽にかけて、文字通り血と汗でなし遂げた至難のルートである。初登攀以降も成功したのはおそらく二、三パーティであろう。私は松高山岳部が初登攀をなしとげた当時、松本でたまたま先輩にさそわれてバーを二、三軒は

しご酒をして回ったことがあったが、どこでも松高山岳部の四峰正面岩壁初登攀の話でもちきりであつた。

「誰さんは岩にあごをひっかけて登った」とか、

「誰さんは上のハングで墜落し、三本よりのザイルのうち二本が切れた」

などと、バーのホステスが目を輝かして、まるでそばで見ていたような話をする。私など穂高二年目という若輩は、隅でちこまっておらざるをえなかつた。そのあでやかな興奮の渦と、私の嫌いな煙草の煙がもうもうと充満していた光景は、忘れえぬものであつた。

また、松高ルートのすぐ東を、松高ルートと並行して走る新村ルートは、青白ハングのルートと呼ばれ、ひさしのように突き出した、何メートルもある大オーバーハングを越すルートで、それは天才新村氏によつて初めてなしられた超人的ルートである。初登攀以来、おそらく一パーティしか試みられてはいないはずであつた。

さて、これらのルートは、いずれも当時技術の最高峰と目され、恐怖のルートとされていたものである。もちろん、積雪期の登攀は夢にも考えられないところであつた。

八高山岳部の尖鋭分子は（私もその一人であると自負していたが）、滝谷の各尾根を完登し、いよいよつぎの目標、屏風岩第一ルンゼ、第二ルンゼさらに又白四峰の研究を開始しようとしていたのであつた。その時大戦が勃発し、それらの夢は消滅してしまつた。

その後終戦となり、すでに述べたように、私は屏風岩の大岩壁に向かつたわけである。つまり私

は、先人が開拓したルートをきわめた上で未踏のルートに挑むというステップ・バイ・ステップの原則を踏むことなく、屏風岩の大岩壁攻撃という飛躍的な事業を行なつたのであつた。

したがつて私は、屏風岩の仕事が終つたあとでも、ステップ・バイ・ステップの原則を犯したことの悔恨があとをたたず、又白四峰のルートが頭にこびりついて離れなかつたのである。また前の年の夏試みようとしたときは、出発直前に主力メンバーの松田が盲腸になつて、悲涙をのんでゐる。

七月二十六日夜の協議は、八高山岳部がなしえなかつた目標をいよいよ試みる時がきたという興奮と、飛躍を犯した罪を今こそ償ふことができるか、それとも岩壁の掟を破つた罪の報いとして、あの壮絶なオーバーハングからふり落とされるか、つまり贖罪となるかそれとも断罪となるかという複雑な気持が交錯していたのだつた。

しかし、慎重協議の結果、新村ルートに石原（兄）―松田、甲南ルートに高井―森、それにこれは四峰正面ルートではないが、やはり困難なルートである明大ルートへ赤嶺―水原―高瀬と三パーティを同時に送り出すことになつた。

私にはこの計画がむりとは思われなかつた。私は、メンバー編成を終えた時、岩稜会もよくこまめで成長したものだと思つた。当時としては、技術の点からも登攀器具の点からも、この三つのルートを同時になしうる登山グループは他にあるはずがなかつた。

しかし他方、この計画のどこかに盲点というか、落とし穴があるのではなからうか、魔の口がわれわれを呑み込もうとしているのではなからうかと、テントの隅を見つめ、熱した頭をむりに冷静にして、その発見に努力したが、そういう点は見つからなかつた。私はついに、寝支度している各テント

に伝令を走らせて、明日のアタックに加わる者を集めて、この計画を発表した。

しかし、屏風岩以来のいくたの経験のためか、彼らにはいささかの動揺もない。やるぞという猛烈なファイトが私にもひしひしと伝わってきた。

私たちは、ルートそれぞれについて、注意すべき点を検討しあい、登攀器具をわけあった。彼らがテントにもどってゆくと、私はホッとして寝袋に入った。

翌朝、相変らずの雲ひとつない快晴である。どのテントも新人は朝食の準備であわただしく動きまわり、リーダーは装備の点検に目を光らせる。ビッグクライムを前にしてのいつもの光景に、時が流れた。やがて四峰又白隊が二名、二名、三名とそれぞれまとまって、ふくれ上がったサブザックを背おって出発した。

さて私は、この日の三重県の講習会で五・六（五峰と六峰の間）の雪溪でのグリセードの練習と、六峰から五峰にかけての容易な岩場での基礎練習をしようと考えていたので、湊沢、池の平に点々と散らばっている三重県のテントにそれを伝えた。

四峰又白隊が出発してから約一時間後、講習会参加者を含めた私たち約四十名は、五・六の雪溪を登っていった。このとき私といっしょに出発した岩稜会のメンバーのうち三名には、四・五の科尔（鞍部）に終日坐りこませ、北尾根を縦走する一般の登山者に、

「仲間が又白側を登っているの、落石にはとくに注意していただきたい」

と頼む役割を命じ、その三名にはアタック隊七名が登攀を終ったならば、いっしょになって三・四の雪溪をくだってテントに帰るように伝えた。女性群はテントキーパーとして残した。

私たちは五・六の雪溪でのグリセードの練習を終えた後、五峰頂上へと移動した。その時、私は急に、五峰の又白側に突き出した尾根の突端にゆけば、四峰の登攀を見物できるはずだと考えた。少なくとも甲南ルートの高井・森には連絡がつくだろうと思った。そこで、講習会の先生方に、五峰の頂上から四・五の科尔にかけて休憩してもらうように頼んでおいて、岩稜会員数名とともに又白側に突き出た尾根に沿って進んだ。

その時、とつぜん右側四峰正面の方から、

「待て」

とか、

「ザイルを引け」

といった、短くて厳しい、あの困難な岩壁登攀中に発する独特の叫びが、断続的に聞え、岩壁にクライマーがいることを知った。しかし、歩いている自分の足もとが危ないので、そちらをふり向くことができない。やがて私はもうい岩のナイフリッジの突端に着き、そこにへばりついたはい松に坐りこんだ。私のいる場所の三方が深く切れ落ち、空中に浮いている感だ。あとからついてきた連中が危なっかしい格好ながら、適宜落ち着くのを確かめて、私は四峰の正面岩壁に目を移した。

約二百メートル、ズバツと切れ落ちた大岩壁が、真夏の太陽とともに目に飛びこんできた。十四年前、初めてこの岩壁を眺めた時の恐怖がまざまざと思い出された。甲南ルートが見えるはずだと目で追うまでもなく、岩壁の中でうごめく人影を発見した。急に私の耳もとで、

「アーラヨ」

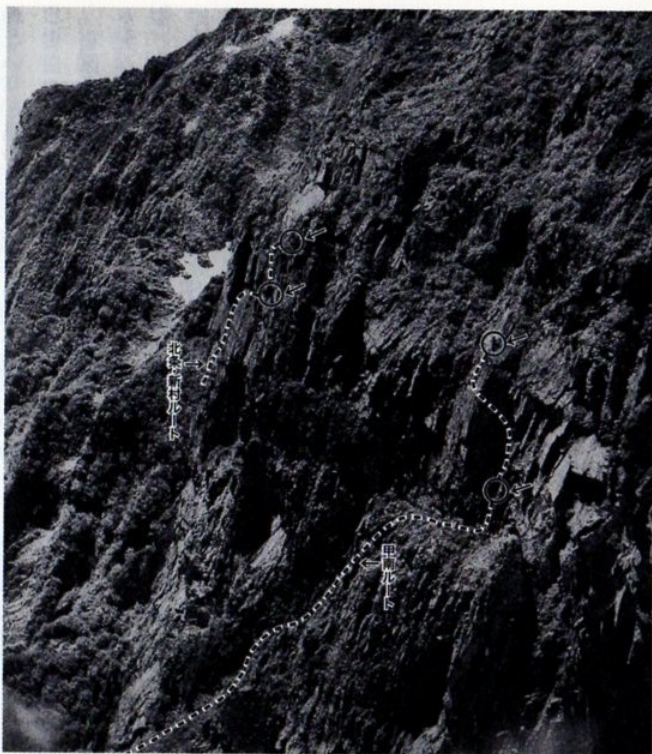


写真19 五峰又白側尾根から見た四峰正面岩壁 (S26.7.27)

け、今ここから見える
新村ルートも登った。
こだまが四峰の岩壁に
反射してもどつてく
る。高井は目下、甲南
ルートの最悪の場所、
ハング帯を乗り切るた
めの苦闘の最中で、返
事どころではないらし
い。それを二十メー
トル下から確保する森も
懸命だ。とつぜん、
「アーラヨ」
のコールサインがど
こからともなく伝わっ
てきて驚いた。そう
だ。新村ルートへ行っ
た二人が見えるかもし



写真18 四峰又白側正面岩壁

I 松高ルート II 新村ルート III 甲南ルート ←は赤嶺隊が入った洞窟

と、私にくつつい
て坐り込んでいた沢
田が岩稜会特有の
コールサインを叫
ぶ。(沢田は上高
地、立山などで厚生
省国立公園の管理人
を勤め、五十一年現
在、沖縄西表島国立
公園管理事務所長を
している。このとき
初めての山行き、三
十年一月、「氷壁」
のモデルとなった前
穂高での遭難で凍傷
になり、足の指三本
を失ったが、その後
も元気で登りつづ

れない”と思って大急ぎで岩壁の上をあちこち目を走らせる。

「青白のハングを越したところだ。こんなすごいのは初めてだ」

石原（兄）の声だ。声の方向を捜すと、三十メートル以上もあるうかと思われる、青白く剥げ落ちた大ハングの上に、けし粒のような二つの黒点が見つかった。一つの黒点がさかんに手を振っている。いや、驚いた。今年前十時三十分、こんな早い時間に青白の大ハングが越えられるとは、夢想だにできなかった（写真19）。

「時間が早過ぎる。あとも手ごわいぞ、慎重にいけ」私は叫ぶ。

「了解」

松田ののんびりした声だ。やがてけし粒のうちの一つが離れて、じりじりと岩壁を移動し始めた。

「松田だ」

登り方ですぐわかる。松田はハングの上のマナ板のような壁を、太陽をいっぱい浴びながら、右へ右へと移動する。身の毛のよだつようなすばらしくも美しい光景だ。呆然と見とれる。とつぜん、

「新村ルートは二人はどこまで登ったか」

高井の声に、甲南ルートに目を移すと、高井はハング帯を登り切つてよぶんのザイルをたぐり寄せている。

「青白のハングを越した。松ちゃんは今最後の壁をトラバースしている」

沢田が叫ぶ。

かくして正午頃、二つのパーティは四峰の頂上に立った。

私たちもナイフリッジの先端から五峰の頂上へもどり、あちこちの岩の上で寝ころがっている人たちを集めて、五峰の頂上から五・六の科尔へとおりはじめた。

私は喜びでいっぱい、足場、手がかりも目に入らないくらいだ。長年のしこりが瞬間に消え去った思いである。八高山岳部のこと、戦争中のこと、岩稜会のことなど、楽しかった思い出があとからあとから浮かんで消えてゆく。

五・六の科尔では一同の集結を待ってただちに雪渓をおり始めた。講習会の先生方が、午前中のグリースードの訓練を思い出しつつ、おっかなびっくりで、各自に滑り始める。私はその中を彼らの速度に合わせてゆるりゆるりと下降した。又白の岩壁へとりついた七名は、待機していた三名と会い、三・四の雪渓をくだって今頃はテントに着いているかもしれないと思った。

私たちが下りつつあるはるか下方、五・六の雪渓が池の平の広い雪渓に合流しようとするあたりに、そのあたりは傾斜がゆるやかで、グリースードすることもできないほどであるが、その雪の上を四つんばいになってこちらへ登ってくる者がある。誰も彼も皆立って歩いているのに、どうして四つんばいではっているのか。

「何をやっているのだ」

とつぶやいたが、次の瞬間、私は、彼は疲れが激しく、それに急ぎ過ぎるあまり立っていることができないのだとわかった。誰だろうと思ってよく眺めてみると、それは四・五の科尔に待機させていた三人のひとり三林である。私の心臓は早鐘のように打ち始めた。

「三林どうした」

私は絶叫した。三林は私の声を認めてビッケルを杖に立ちあがると、
「バックカース、遭難でーす」

ととぎれとぎれに叫ぶ。私は、

「そんなばかなことがあるか」

と思いつつも、

「どこで遭難したのだ」

と叫ぶと、

「明大ルートです」

という。私はハッとした。

「ああそうだ。明大ルートの三人がいた」

しかし、

「どうしてハングのない明大ルートで遭難が」

と思つたが、すぐ、

「あそこでやられては終りだ。三人とも助かるはずはない」

と直感した。

私は、これまで四峰又白側で墜落し、原形をとどめぬまでに粉碎した、かつての遭難者の数々を思い浮かべた。あの恐ろしい四峰の壁を三人がつぎつぎにザイルに引きずり落され、空中を飛び散つて

ゆく光景が目に見えた。頭がカーとなり、足の下は雪渓が真赤に染つてみえた。

「赤嶺先生、水原、高瀬、ああ、岩稜会にもついにこの事態が起きたのか、たのむ、夢であつてくれ！」

ガリッと歯を咬んで、もう一度目を見開くともう三林が近くまできていた。

「誰が遭難を伝えたのだ」

「僕たち三名と、新村ルートと甲南ルートへいった四名とが、三・四のゴルで休憩して明大ルートの三名を待っていました。そしたら又白側の谷から理科大学の山岳部員という人が登ってきて、『岩稜



明大ルート 下部の雪渓はC沢

会が明大ルートで遭難した』といわれたのです。それだけで、それ以外は何もわからないのだそうです。部隊長（石原のニックネーム）、松ちゃんたちは皆直接池の平のテントへ向かわれました。私だけ報告にきました」

私は、ひとまずここで坐って気を落ち着けて、これから先のことを考えようと思い頭を上げた時、大勢の講習会の先生方が私を取り巻いて、一斉にこちらを見つめておられるのに気がついた。

「ああそうだ。私はこうしてはおれない」と思っ、むりに落ち着いていった。

「皆さん、お聞きのようにどうも岩稜会の者が遭難したようです。まことに申し訳ありませんが、講習会はこれで中止させていただきます」

私は頭を大きく下げた。それから沢田たちに向かって、

「君たちはテントへ帰って炊き出しをするように。また、石原、松田、高井、森の四人はその握り飯とザイル、ハーケンなどの登攀器具を持って四峰又白側の岩壁の下、明大ルートの取り付きあたりにくるように伝えてくれ」

そういうと、私は岡田、三林を連れて、多数の視線を背に感じながらふたたび五・六の雪溪を登り始めた。

勝利の栄光から一転してみじめな敗北。八高山岳部以来、屏風岩、明神山群等、いくたの困難な登攀を通じてただの一回も身内の遭難を味わったことのない私であったが、ついにおそろしい現実がやってきた。その時の覚悟はできていたつもりであったが、実感としては限りなくみじめであった。

五・六の科尔から又白側へと急ぎ足でくだってゆく。赤嶺さんの、何かを訴えたいような苦しいような顔がとつぜん浮かんだ。赤嶺さんとのここ六年間のつきあいが一斉に甦ってくる。赤嶺さんは私よりちやうど一歳下で、ともに四日市海軍燃料廠で終戦を迎え、二十年九月、ともに神戸中学の先生となった。その時、全校生徒の前で、赤嶺さんと私とが軍国調の就任挨拶をし、それを思い出すたびに

ほほえむのだったが……。一昨年は両親を疎開地から引き取られ、昨年は私が仲人になって結婚されたばかりだ。もし赤嶺さんがいなくなったら、年老いたご両親、奥様はいつたいどうなるのだ。

つづいて高瀬の人なつこい目がほほえみかけてきた。高瀬は国籍が違っただけに、口うるさい神戸の街で問題が起きるに違いない。水原は……。いやもう何もかも考えたくない。三人の幻影をふり払おうとするが、そうすればするほど、どぎつく頭の中を占領する。

狭い雪溪があらわれた。私は無意識にグリセードの姿勢を取って滑ってゆく。ついに又白本谷のただっぴろい雪溪の上に乗った。遭難現場が見えるはずだと思っ、仰いだが、前穂東壁から四峰正面にかけては逆光で見にくく、それに岩壁は静寂そのもので、事故が発生したような気配はまったくない。

三名が墜落したとすれば、四峰の岩壁とC沢の細長い雪溪との間にできたシュルンド（溝）に落ち込んでいるか、それともC沢の堅い雪溪にたたきつけられているはずだと思っ、C沢を見つめると、C沢にはゴマ粒のような黒点が点々と見える。さらに目を凝らすと、そのうちの一つの黒点が私たちのいる本谷の雪溪のほうへ向かって下ってくる。

私はそれを見ると急にいそぎ足になり、汗びっしょりで息を切らして登っていった。声が届くと思われるところまで近づいた。私は声をふりしぼって、

「遭難はこのパーティですか」

と叫んだ。ただちに、

「岩稜会だ」

という返事が返ってきて、私は改めてガックリした。さらに黙々と登ってゆく。もう普通の声でしゃべれる距離となった。私は、

「遭難は何名でしょうか」

とたずねた。意外にも、

「一名だ」

という返事で、一瞬ほっとしたが、しかし、

「一名などというばかなことがあるものか。何かのまちがいはないか」

あれこれ考えているうちに両者は一体となった。

「私は岩稜会の責任者ですが、遭難者の容態はどうでしょうか」

「さあ、私にはよくわかりません。私は理科大学の山岳部員ですが、理大の先輩が現場で救出作業をしています。私はいま奥又白池の理大のテントに連絡にゆくところです」

この話で、遭難者が一名であることは間違いがなく、しかもまだ死亡してはいないらしいことがわかって思わず、

「ありがとうございます」

と頭を深く下げた。この時私は、いつも頭に巻いていた鉢巻の手拭が雪の上に落ちたが、それには気づかなかった。

その人と別れてからの私は、急に人間に立ち戻ったような気分であった。しかし、一人だけが遭難したということがどうも理解できない。それならあとの二人はどこにいるのだ。また、遭難したのは

いったい誰なのだと、つぎつぎに新しい疑問が起きたが、それもまもなくわかることだと思いがちで、C沢の胸を突くような雪の急斜面を、地下足袋のままで登っていった。

雪溪の右端からは触れれば切れるような岩肌を持った岩壁のすそが続き、その上には四峰の正面岩壁が圧倒的な威圧をもって黒々とそびえている。ついさっき、私たちの仲間が新村ルートと甲南ルートを登って、私はこの岩壁とはぐつと親しみを増したつもりでいたのに、今ここから見上げる陰惨そのものの顔つきには、まったく親しみを感ぜられなかった。岩壁は、

「ざまあみろ」

という表情でもない。むしろ、

「お前など歯牙にもかけていないぞ」

という、突き離れた顔つきで、取りつく島もない。四峰に向かって三人がぶじでいますようにと祈ることもできなかった。

私はただ黙々として登る。急に近くで人声が聞え、仰ぐと眼前の岩の間に数名の人々が見える。遭難現場だなどと感じ、用心深く雪溪を横切ってそのほうに近づいた。雪溪と岩壁の間には、いたるところ深さ五メートルぐらいのシュルンドができています。私は雪溪の端に立ち、雪の崩壊に注意しつつ、雪溪から、シュルンドの底に降りる場所をキョロキョロと探す。とつぜん上から、

「そこが渡れますよ」

と指示してくれる。雪溪からシュルンドの底に降り、水に濡れた垂直の岩肌の中に小さな足場を探し出して、五メートルほどよじ登ると、六畳じきぐらいの平坦な岩棚に出た。そこで人々が作業して

いた。

ハーケンがあちこちに打たれ、ザイルが縦横に走っている。立っている人々の間に、ザイルをぐるぐる巻きつけ、横になったまま動かない長い荷物のようなものがあつた。それが遭難者だとわかつた。

私は立っている人たちに向かって、

「私は岩稜会の石岡と申します。このたびはとんでもないことをしでかしまして、皆様にご迷惑をおかけしております。どうかよろしくお願い申します」

という、そのうちの一人が、

「ああ、屏風岩の石岡さんですね。私は理大のOBごんたいろ権平ごんたいろです。いや遭難者は助かると思いますよ。そのシュルンドに落ち込んでいたのを、今ここまで運び上げたところです」

と答えられた。私はその人に会釈すると遭難者のそばに近寄つた。ところが、立っていた人たちのうちの一人が、急に私の前に膝をついて、

「お忙しいところわざわざ救援にきていただいて本当に申しわけありません」

と上ずつた声で、私にペコペコと、額が岩につくほど、くりかえし頭を下げられる。私は驚いた、誰からも礼をいわれる筋合いはないと思ひながら、その人の顔を見てあつと思わず声をあげた。

「あつ、赤嶺さん。わしだ、わしだ。バックスだ」

と思わずどなったが、赤嶺さんは虚ろな目の、くしゃくしゃの顔で、まだ私と気がつかない。私は赤嶺さんに顔をくつつけるようにし、肩をぐいぐいゆさぶると、初めて気がついた。

「バックス」

と叫ぶと、私に抱きついてオイオイ泣き出してしまった。

それから赤嶺さんのときれときれの説明によつて遭難の顛末がわかつた。理大の方も、赤嶺さんの話に聞き耳を立てておられる。それはつぎのようであつた。

赤嶺、高瀬、水原のうち、リーダーはもちろん赤嶺さんだが、赤嶺さんは技術的にすぐれた高瀬をザイルのトップに立て、水原をラスト、自分はザイルの中間に入つた。そこにいて、ルートを誤らないように指示するつもりであつた。しかし、高瀬の登攀のスピードがあまりに早く、とてもルートを観察する余裕がなかつた。しかし、岩場は容易であるので、どんどん高度を上げていった。半分以上登つたところで、傾斜がほとんど垂直、それに手がかり、足場もきわめて小さいという、困難な場所にぶつかつた。明大ルートにはそのような難しい場所はないので、当然ルートの誤りに気がつかねばならなかつたが、高瀬ははりきりすぎていたので、そのまま強引に登り、大きな洞穴に入り込んだ。赤嶺さんも登っていて、これはおかしいとは思つたがそのまま登り、けっきょく三人とも洞穴に集まつてしまった。しかし、洞穴の上は岩がすぐくかぶつていてまったく手がつかないので、ここではじめてルートの誤りを悟つた。

今登つてきた場所は自力ではとても降りられないので、こういう場合の最後の手段である懸垂で降りることになった。結び合つていた三十メートルのザイルをほどき、洞穴の中にハーケンを打ち、捨て縄をかけ、それにザイルを通し、ザイルを二重にして洞穴から十五メートルたらしした。そしてまず高瀬が懸垂で下降した。高瀬は十五メートルを降り終ると、適当な足場を見つけザイルから離れた。

これから先は、洞穴の二人がひとりずつ懸垂で下って三人が集合し、つぎに二重にかけたザイルの一方を下から引っぱってザイルを降ろし、その場所にハーケンを打つてもう一度三人がつぎつぎに懸垂する。そうすれば正しいルートにもどることができるわけである。

高瀬は上に向かって、

「つぎの人、降りて下さい」

と叫んで、つぎの懸垂にそなえ、ハーケンを打つ場所を見つけるために三メートルほど横へトラパスした。このとき、高瀬は足を滑らせた。洞穴の中にいた赤嶺さんは、高瀬の声を聞き、つぎは自分が懸垂でくだろうと洞穴から下をのぞいた。そのとき赤嶺さんの目には、両手、両足を大きく広げたまま空中を落ちてゆく高瀬の姿が見え、やがて彼は岩陰に隠れ、どこかでバウンドしたためか、ふたたびはるか下方の空間を落ちてゆく姿が見え、つぎにまた岩陰に隠れ、そのまま見えなくなってしまうという。

赤嶺さんが、高瀬が墜落したことを水原に伝えると、水原は身体がガクガクになり、活動能力を失った。赤嶺さんは、やむなく垂れ下がっているザイルを引っぱり上げ、そのザイルの端で水原をハーケンに縛りつけ、

「必ず救援隊がくるから、それまでは動くな」

と厳命し、ザイルの残りを一本にして岩壁にたらし、そのザイルで約二十五メートルを懸垂で降り、ザイルがなくなつてからは明大ルートの下半分を懸命に下降し、C沢のシュルンドに落ち込んでいる高瀬を発見した。

赤嶺さんは、まさに息が絶えんとする高瀬を抱いて、岩と雪にはさまれた冷たいシュルンドの底で長い時間を過した。まもなく救援にきてくれた人たちは、いずれも見知らぬ人ばかりで、彼はだれかれとなく、ただ、

「申しわけありません」

をくり返すだけであった。それで私に対しても、私と気づかず、同じように「申しわけありません」をくり返したわけだった。

赤嶺さんの話が終るとつぎは権平氏から、救援にこられたときのいきさつが簡単に話された。

「墜落が起きた時、理大の現役連中は前穂高東壁に取りついていて、私たちOBは奥又白池のテント地にいた。私はテントの中にいたが、たまたま一人がテントから十メートルほど離れた草地にいた。テントから四峰は見えないが、その草地からは良く見える。その草地にいた者が四峰での墜落を発見し、『四峰で墜落』と叫んだ。その声に私はテントから飛び出して草地まで走ったが、その時にはまだ墜落中でした。また、前穂高東壁を登っていた理大の現役の連中は、この墜落を全員が見ていた。しかし、墜落があまりにも壮絶であつたので、新人は足腰がガクガクになり、登ることも降りることもできなくなつた。そこで理大のOB連中が東壁に集まり、目下ガクガクになつた新人をおろす作業をしているところです」

こういつて権平氏は、東壁のほうをふり向かれた。私も東壁を眺めたが、黒々とした絶壁の中でさかんにハーケンの音、呼びかう人々の声がしていた。

また、何人かがC沢の雪渓を、八本爪のアイゼンをはきながら、しかも雪渓の上端から垂らされた

ザイルを使って懸垂できがっていた。私は、墜落を見たショックがいかに大きかったかを知った。さて、権平氏自身は、四峰での墜落を見られてから、ただちにザイル、ハーケン類を大量に持参して、この場所に駆けつけ、遭難者がシュルンドに落ち込んでいるのを発見し、岩壁のあちこちにハーケンを打って遭難者をつり上げ、今ちょうどこの岩棚の上まで運ばれたところであった。

私は事情がわかり、横たわっている高瀬をのぞき込んだ。上衣もズボンもズタズタに切れ、肉体が露出していた。顔が二倍ほどにふくれあがって、これが高瀬だとは思われないほどであった。私が、「高瀬しっかりしろ」

と呼ぶと、かすかにうなずき私に気づいたようであった。しかし、何かつぶやき続けている。耳を寄せてみると、

「お母さん、すみません。お母さん、すみません」
とくり返している。

私は、高瀬が落ちていたというシュルンドを見おろしてみた。C沢の雪渓にそって、岩の壁と雪の壁にはさまれた狭い楔状のシュルンドがどこまでも続いているが、その底には、岩壁からはげ落ちてきた、大は机ぐらいから小は拳ぐらいまでの岩屑が一メートルほどの高さにびっしり積み重なっている。しかし、驚くべきことに、高瀬が横たわっていたというその場所だけ二メートルほどの長さにわたって岩屑がまったくない。

高瀬の猛烈な落下のエネルギーは、その楔の摩擦で吸収されたわけであるが、それにしても、落下

地点があと一メートルどちらかに寄っていたならば、岩屑に激突してひとたまりもなかったであろう。あるいは直接C沢の雪渓に叩きつけられても、身体は粉碎していたであろう。それよりも、途中二回もごつごつの岩壁でバウンドして、どうして五体が満足にくっついてるのであるのか。私はシュルンドから目を離して絶壁を見上げた。驚くべき遙かの高さ、もう頂上近くと思われるところに洞穴らしい黒い穴が認められる。それから垂れ下がっているはずのザイルが、赤嶺さんは見えない。うが、私の目には見えない。

私は高瀬が落ち込んだ場所のちょうど真上十メートルぐらいのところに巨岩が突き出しているのを見つけた。もし私とその岩の上に立って、岩屑のないそのシュルンドの底をめがけて飛び降りたとしても、うまく降りれるかどうかとも自信は持てないと思った。

私は、はるか上方にかすむ洞穴を見上げ、次に、足もとに横たわっている高瀬を見下ろし、鳥肌が立つ思いであった。高瀬がいま生命を保っていることは、信ずべからざることだ。またそれだけに高瀬が今後助かることになるとは、万が一にも思えなかった。

いよいよ高瀬を、理大の方が持つてこられたテントに包んで、C沢を下降させることになった。高瀬の上半身を持ち上げた時、左肩がグニャリと背後に回転し、骨折か関節がはずれていることがわかった。権平氏が、

「じつは私たちの仲間に、東北大学の外科にいる葛西^{かさい}という男がいるんですが、それが明日奥又白池にくるようになっていいます。今彼がここにいればこういうことにはなれていきますから大いに助かるのですが」

といわれたが、その言葉が終るか終わらないうちに、コンベックス（凸状の斜面）して下の見えないC沢からとつぜん人の頭が現われた。とたんに権平氏が、

「おお、葛西」

と叫び、葛西氏も、

「予定より一日早くこれるようになった。奥又白池へ着いたら遭難だということに急いでやってきた」といながら、ふうふう息をついでおられる。私は百万の味方を得た思いであつたが、それでも助かるかもしれないという気持はわいてこなかった。葛西氏は、カンフルなど注射をいくつも打たれたあと、左肩を動かしてみても、「肩の関節がはずれている。ぼくは関節をはめるのが得意なんです」といいながら、しきりと努力される。しかし、高瀬の肩はまったくグニャグニャで関節がはまりそうにない。私は、

「肩の関節なんかどうでもいいですよ」

といったが、葛西氏は、

「今はめておかないとあとからはまりにくくなる」

といいながら、一生懸命やられる。理大の方々は、先刻高瀬を引き上げたときの、水の流れるシュルンドの中の仕事で、シャツなどぐつしよりと濡れて、寒さで身体を震わせておられる。ついに葛西氏もあきらめて、そのまま高瀬をテントに包むことになった。

生命のある重傷者のC沢下降は大変な仕事だつた。C沢の左岸四峰側のシュルンドとC沢の右岸インゼル側のシュルンドに理大の方が二名ずつ入り込み、そこからザイルを一本ずつ垂らして、遭難者

をV字状に確保する。ザイルがいつぱいになれば、シュルンドの中の者が場所を下に移す。遭難者には数名が寄り添って舵取りの役割をする。権平氏、葛西氏それに私も遭難者に付き添った。葛西氏と私とは、ときどき梱包された布の上から高瀬の口元のあたりをうかがつて様子を見た。というよりも、高瀬の息の有無を確かめた。

三十分も下降した時、高瀬がブツブツいつているようなので耳を近づけると、

「寒い、寒い」

といっている。よく見ると、彼を包んでいたテントの一部がめくれ上がって、腰あたりの肉が直接雪渓を滑っている。一時ストップしてテントの端を腰の下へ巻いてやる。しかししばらくするとまた肉体が露出する。遭難の運搬ならばこの配慮はいらない。いつまでこれが続くだろうか、などと思つた。

C沢を三分の二ほどくだつた頃、C沢には幅五メートルほどの大きなクレバス（雪の割れ目）が横たわつていて、雪渓を上下に断ち切っている。クレバスにテスリ用のザイルをかけわたし、そのザイルにカラビナをかけ、遭難者を吊り下げて上の雪渓から下の雪渓へと渡した。まったく命がけの仕事である。この頃、本谷を急ぎ登つてきた石原ら四名が到着した。C沢を降り切つた頃には、長い夏の日もようやく暮れようとしていた。四峰の岩壁をふり仰いでも、もはや洞穴は見えなかった。水原に声をかけてやりたいとは思つたが、なぜかそれができなかった。水原は、洞穴の中からC沢を蟻が物を運ぶように高瀬の肉体が降ろされてゆくのを見おろしていたことであらう。

C沢の末端には、理大の方々によってテントが張られていたので、高瀬はすぐテントに収容され

た。石油コンロでテント内を暖め、高瀬の梱包を解き、葛西氏は改めて高瀬を詳しく診察された。不思議にも一カ所の骨折もないということであった。とくに左肩の関節ははずれていないという。葛西氏は、

「道理でうまくゆかなかった」

と苦笑される。私にも、もしかすると助かるかもしれないという、かすかな希望がわいてきた。

しかし、二年前、私たちの仲間ではなかったが、御在所の岩場でルンゼを三十メートルほど転落し、骨折はしたが非常に元気で医者も大丈夫だといっていたのが、一週間たった時とつぜん容態が変わり、私が病院にとんでいったときはちょうど臨終であった。死亡してからわかったが、臓腑が破裂していたそうである。

高瀬にも内出血のおそれは多分にある。葛西さんも、口には出されないが、その心配をされていることはありとうかがわれた。

葛西氏が又白のテントへ帰られたあと、高瀬の身体がばかに熱いので体温計で測ってみると、四十二度もある。驚いて葛西氏を迎えにゆく。葛西氏がやってこられ、ボンボンと診察した後、

「さつき雪溪を降ろす時身体が露出していたでしょう。だから風邪をひいたんですよ。この薬をのめば、熱は明日の朝までにはひくでしょう」

ということであった。

さて、私たちは赤嶺さんと三林をテントに残し、他はいったん涸沢へ帰ることにした。涸沢のテント地では、遭難の様子は皆目わからないはずであるし、それに、明日水原を救出するための準備が

あった。

私は、明朝、冷たくなった高瀬と再会するような気がしてならなかった。

私たちは本谷の雪溪を懐中電燈で足もとを照らしながら、一列になって降りていったが、ふいに、懐中電燈の輪の中に結んだままの手拭が現われた。拾い上げてみると私の手拭であった。いつ落したのかわかったが、それにしても、この広い本谷の雪溪で登りとくだりと同じところを歩いたとは珍しいことだと思った。五・六のころには北穂の小山章氏が迎えにきておられた。

翌日は、早朝から水原の救出作業が始まった。それには石原を隊長とする四名が向かった。石原らはザイルの長さごとにハーケンを打ったので、洞穴までの距離を測定する結果になった。水原はぶじ救出され、また墜落距離は一七〇メートルと算出された。丸ビルをいくつも飛び越したことになる。

一方、高瀬は葛西氏の言のごとく、翌朝には熱が下がり、異常はまったく認められなかったが、身体中腫れあがり、呻くだけで食欲はなかった。しかし、さらに翌日になると食欲も少しずつ出て、気分も良さそうであり、立ち上がることもできるようになった。葛西氏と相談の結果、背おって下山することにした。高瀬を背負子に腰掛けさせ、皆が交代で背おった。同時に涸沢にある岩稜会のテントを梓川と奥又白谷の出会いまで移動した。

高瀬を松高ルンゼの下までやっと降ろし、つぎに大小の石が無数にころがっている又白の押出しを下っていく。このとき高瀬が歩いてみたいといいた。そこで、両側から肩を抱いて歩かせたが、せいぜい五メートルか十メートルで坐り込んでしまう。目はほとんどつむったままである。この頃に

はすっかり暗くなっていた。一方、淵沢に残った連中は、とくに女性群が中心となってテントの移動を完了させ、炊きたての握り飯を作って、それを伝令に持たせてきた。

梓川を見おろすと、キャンプの火が高々と燃え上がっている。伝令の語によれば、高瀬のテント到着と同時に景気よく花火を打ち上げる手はずが整っているという。私たちは、この伝令が持ってきた握り飯を食べると、これまでの緊張が一度にほぐれ、急ににぎやかになり、高瀬のあとからガヤガヤとついてゆく。

テントまであと百メートルぐらいになった時、高瀬はまた倒れるように石の上に横になってしまった。彼の胸は、まわりを囲んだいくつもの懐中電燈の輪の中で大きく上下している。懐中電燈の輪は、

「早く起きよ」

と催促しているようだ。しかし、とつぜん胸の動きが止まった。呼吸が止まったのである。この瞬間、樂觀ムードになりきっていた一同は、あっと色を失った。

「カンフルだ、カンフルだ」

と叫んだが、葛西氏から貸していただいたカンフル等の入った薬品袋は、もう必要がなからうというのでテントにおろしてしまっていた。伝令がカンフルを取りにすつ飛んでいった。すっかりあわてこんで、胸を押したり、背をたたいたりしても息をふき返さない。私は、

「なんということだ、ここまできて死なすということがあるか」

と、いらだたしさ、くやしきで歯の根も合わない。

何秒が経過したであろうか。カンフルが到着する前に、フーッと胸が動いて息がもどったのである。

私は「担架を作れ」とがなり立て、数人が墨をぬったような林の中へ飛びこんでいった。薬品袋が届くと、カンフル、ビタカンなどどんどん注射した。約一時間休憩し、担架に乗せて担いでゆく。今度は先ほどとはうって変って、ただ担架のきしむ音がするだけで葬儀そっくりである。テントに着いたが花火どころではない。話をするのも耳もとでボソボソつぶやく。景気よく燃えていた焚き火もいつしか消えてしまった。

翌日は、サブザックをかついだ私が先頭、つぎにテントのシートで覆った担架をかつぐ四名が続き、そのあとから、頭の上に三十センチも突き出した大リュックを背おい、腰を折り曲げた哀れな格好の残りの連中が、女性をまじえ一列に続く。ラストを妻が長女の手を引いてとぼとぼと歩いていく。いつ高瀬の容態が変わるかわからないというので全員意気消沈である。それはどうみてもけが人の運搬ではなく遺体の運搬であった。

九日前、コブ尾根を越した時の意気天をつく有様とは、まさに天地の差がある。梓川を渡り、徳沢に近づくと、急に大勢の人とすれ違うようになった。ゆきかう人はきまって、

「御愁傷様です」

とていねいに頭を下げられる。先頭の私は、

「なにが御愁傷様だ。まだ生きているのだぞ」

と、口の中でぶつぶつぶやきながら、それでもいちいち頭を下げるのだが、あまりに頭を下げる

回数が多く、腹が立ってしょうがない。

それかといって、この情ない役目を誰かに交代してもらおうということもできない。その腹立ちがついついあとからくる隊員に当たって、なにかと叱りつける。一同はますますシユーンとなり、いつそう葬儀に似てくる。悪循環である。

やがて、明神の吉城屋に着いた。道路わきに設けられたベンチに担架をおく。人々が寄ってきてジロジロ眺める。私は担架のシートをひんめくり、

「おい、高瀬、うどんを食うか」

というと、うなづくので、うどんを運んできたが、二杯ペロリと平らげた。まわりにいたやじ馬が、

「なんだ、生きていたのか」

といった顔つきで散っていった。私は高瀬の食欲にすっかり驚いて、

「やっと、本格的に安心かな」
と思った。

上高地の西糸屋に着いた。西糸屋にはたまたま八高山岳部の先輩谷本医師がきておられた。地獄で仏とはこのことである。谷本先輩は戦前明大ルートを登っている。私の話を聞くと、とても信じられないという顔で、それゆえ慎重そのものの態度で診察される。頭の髪を一本一本わけて見る。肋骨も一本一本克明にさぐる。あちこち圧迫しながらいろいろと質問する。脈拍をみる。結論として、
「信じ難いことだが、どこにも異常はない」

と話される。

高瀬と、それにつき添う三林を残して、他の者は翌日神戸へ帰ったが、高瀬は十日間西糸屋で養生した。

高瀬が郷里へ帰ってくる日、私たちは神戸駅に出迎えた。高瀬がニコニコして、ちゃんと誰かの服を着て、ビッケルを持って電車から降りてきた。私は神戸の町を彼の後から歩きながら、

「奇跡が歩いている」

と思った。なんども、彼が透明ではなからうか、足は本当にあるだろうかと思なおした。

なお高瀬の全身のすり傷が治ってゆく時、傷口には新しい肉が盛り上がり、カサブタができたが、そのカサブタが合計一貫目は取れたというので、彼のことを「カサブタ一貫」とも呼ぶようになった。

雪の上では、何百mも滑り落ちて助かったという話はあるが、岩場を一七〇メートル落ちて助かったという話は聞いたことがない。これで高瀬が、日本はもとより、世界でも珍しい、記録の持ち主であるという話を終るが、この話にはもう一つ付録がついている。

事件から二十日ほどたった八月も半ばのある日、谷本先輩から私のところへ問合せがきた。その頃、名古屋大学医学部では、毎夏穂高小屋で高山医学の研究を続けていた。その手伝いや荷物の運搬等のアルバイトに、岩稜会から一人出してほしいというのだ。

「できれば高瀬君がいい」

というので、私がそれを高瀬に伝えると、彼は「行きます」という。

そんなわけで、彼は穂高小屋で約二週間を過ごすことになった。ちょうど明大ルートの事件から一カ月たった日の昼頃、高瀬は穂高小屋の食堂で、木の椅子に腰かけて、諸先生方といっしょに食事をしていた。そのとき高瀬が、

「僕が明大ルートで墜落したのは、ちょうど一カ月前の今日、時間も今頃でした」

といい、他の人たちも、

「よく助かったものだ」

と感慨を新たにした時、偶然彼の手から茶碗が滑ってコンクリートの床に落ちた。

しかし、その陶器の茶碗は割れもせず、欠けもせず、しかも米粒一つこぼれるでなく、床の上にそのままきちんと立ったのである。高瀬はもとより、先生方をはじめ一般登山者までがギョツとして、しばし声が出なかったということである。

後になって私はその話を聞いて、茶碗がまっすぐ落ちるように加減しながら落す実験をしてみたが、それは簡単に割れた。

しかし、私には、明大ルートでの奇跡とこの茶碗の奇跡を比べれば、明大ルートのほうがはるかに確率が小さいように思われてならない。

そういう高瀬も、彼が朝鮮の国籍であるが故に、私たちの努力にもかかわらず就職先がまったくなく、はた目にも気の毒であった。やむなく名古屋大学の医学部で臨時の雑役に雇われ犬や兎の世話をしていた。そうしたある日、私は彼に会ったが、彼は生氣なく、

「生きる望みを失いました」

ときびしくいう。私は、

「確かに現実の世界はあまりにも冷たく厳しい。しかし明大ルートで生きた君ではないか、これくらいのことでは負けてなるもんか。必ず機会がくるからがんばってくれ」

とはげましたが、私自身まったくやるせなく暗い気持ちにつつまれてしまった。

しかし、彼はついにS病院の院長先生に見込まれ、そこで勉強してX線技師の資格を取り、八年前すばらしい伴侶をえて結婚した。今では家を新築し、息子は成長して明るい社会生活を営んでいる。

ゼルブストザイル

明大ルートでの遭難の原因は、高瀬が懸垂を終ってザイルから離れた後の軽率な行動にあるが、考えてみると、こういう場合の従来の方式はむしろ危険である。

従来の方式では、クライマーはいざ懸垂となると腰に結んだザイルを解いてザイルから離れてしまうことになる。また懸垂を終ったときザイルの末端付近が相当に危険な場所でも、クライマーはザイルから離れなくてはならない。しかも上に残った者がつぎつぎに下降して全員集まることになるので、危険このうえもない。

明大ルートのような遭難をくりかえさないため、こういうやり方を改めなくてはならないと考えているうち、腰バンドなるものを思いついた。これは、各自三メートルぐらいのロープを用意する。ロープの一方の端にカラビナを固定し、ロープの他の端には小さな輪を設けておく。平素はロープを腰に一回まいてカラビナに固定し、残ったロープを腰に二回巻きつけ、ロープの端の小さな輪をカラビナにかけておく。

メインザイルと結ぶときには、メインザイルに小さな結び目をつくって腰バンドのカラビナにひっかければよい。懸垂で下降したときメインザイルにつながったままで確保用のハーケンを打つ。腰バンドのロープを長く伸ばし、その

ハーケンに結合し、その上でメインザイルから離れる。こうすればまことに安全である。要するに、腰バンドはセルフビレーにはもってこいである。また、腰バンドとカラビナを使って懸垂することができる。当時こういうものが外国にあったかどうか知らないが、日本にはなかったのだ、私は雑誌「山と溪谷」一九二号に発表した。今ではゼルプストザイルとして広く利用されている。

しかし、最近そのカラビナが横方向の力で破壊して遭難するという例が発生したのは、残念のきわみである。

北条ルートの発見

写真19には、新村ルートの石原・松田、甲南ルートの高井・森がうつっている。また、この写真を撮った頃、高瀬は明大ルートで墜落したわけである。

さてこの写真がきっかけとなって、北条理一氏と後藤武四郎氏が、新村ルートを、新村氏よりも八年も前に登っていたことが判明した。北条氏は昭和八年八月、新村氏は昭和十六年十月に同じルートを登ったのである。こういうことは登山史の中でも珍しいことであり、登山界にとって青天の霹靂であった。

私はそのいきさつを日本山岳会発行の「山岳」第四十六年・四十七年号に発表した。つぎにそれについて簡単に述べてみよう。

私は、高瀬も郷里にもどり、ほっとしていた頃、新村ルートの初登攀に関する大阪商大部報「雪線」一八号をもう一度読み返した。私の目はつぎの記事に吸いよせられていた。それは、新村ルートのうち青白のハングの上の最後の壁を登る記事である。

「右側には幾本ものリッジが背を並べて頂上に向かって走っている。この道松のテラスから十三メートルほど右のリッジに、かつて使われたリングハーケンが一本岩から生えたように突き出していた。おそらく甲南ルートのトレースに北条理一氏が使用したものであろう」

すなわち、この記事によれば、新村ルートと甲南ルートとは上部では十三メートルほどしか離れていない。だから、

もし二つのパーティが新村・甲南両ルートを同時に登ったとすれば、二つのパーティは壁の上部ではほとんどくっついて登ることになる（新村ルートを登った石原・松田は「北条氏が打ったというリングハーケンは今なおしっかりしていて、そのハーケンを握って登った」といっている。つまり、新村ルートからそのハーケンの所へは容易にゆけるので両ルートは上部で一致しているとみなしうる）。

ところが、新村ルートと甲南ルートを同時に登った私たちの二パーティは、写真19からもわかるように、壁の上部では百メートルは離れていて、両パーティはお互いに見ることもできない話もできなかった（このような壁では、お互いに見えない限り声は相手に達しない）。

また、甲南ルートからリングハーケンの位置に壁を斜めに登ってくることは、写真からみても不可能であろう。

したがって、リングハーケンは新村ルートにあつて甲南ルートにはないということになる。そうすると、そのハーケンは新村氏が登る前に誰かが上から降りて打ったか、それとも新村氏の前に新村ルートを登った人があつて、その人が打ったのかのどちらかとなる。

そこで私は穂高の文庫に詳しい諏訪多栄蔵氏にその話をした。諏訪多氏も驚いたとのことであつたが、その後諏訪多氏は北条氏が記した文庫（管見録）を発見された。それには、

(1) われわれが登ったルートは図では説明できないが、五峰又白側尾根から見てスカイラインより二十メートルばかり五峰によっている。

(2) 壁の直下からとりつき、ほぼ中央に登った。

(3) この登攀にさいして、昭和初期に使われた特徴のある大きなリングハーケンを五本用意し、そのうち二本を使つた。

と記してある。(1)の「五峰又白側尾根から見て」というのは、写真19の撮影の位置であることは明らかであり、「スカイラインより二十mばかり五峰寄り」というのは、写真から見て石原・松田が登ったルートとまさに一致する。ここにおいて、北条理一氏が新村氏より先に新村ルートを登っていたことは決定的となった。それにしても、北条氏の記録がありながら、どうしてこのような誤りが生じたのであろうか。それは第一に、四峰正面岩壁が膨大かつ複雑であつ

て、甲南ルートと新村ルートの関係がはつきりしなかったこと、第二に、北条氏は戦死されていること、であろう。いずれにしろこの発見は、リングハーケンが残っていたこと、甲南ルートと新村ルートの関係が両ルートを同時に登攀したことによって明らかにされたこと、および北条氏の記録が見つかったこと、によるわけであるが、このリングハーケンは石原・松田が登った二、三年後にはなくなってしまったことであるので、北条氏の登攀の発見は、きわどかったといわざるをえない。

それにしても、あの至難のルートをわずか二本のハーケンを使って完登された北条氏の技術には、ただ頭が下がるだけである。

“ネコ”というニックネームをもつ北条氏が猫のように背を丸めて、あの青白の大ハングを乗り越えられる光景が目には浮かぶような気がする。そしてそういう大天才を抹消してしまった戦争に対して、新たな怒りがこみあげてくる。

それ以来、新村ルートは、北条・新村ルートと呼ばれることが多い。

雲海上の日食（昭和三十八年）

山も天体も平地より高いという共通点を持っている。またともに少年時代からのあこがれであり、夢の対象である。私も幼い頃から星を仰いで空想にひたっていた。

昭和十三年三月、八高山岳部が総勢十五名（その当時の名ガイド金州屋、孫人、守、親人の諸氏が加わった）で木曾駒連峰を縦走したとき、私は、後にビルマで戦死した先輩から星座を教わった。

山から帰っても星のことが忘れられず、さっそく星の本を買い求め、神話を読み、夜になれば星図と懐中電燈をもって屋根に登り、深夜まで星を仰いでいた。

また、土星の輪と本体との間からのぞく空の色は筆絶につくせぬという記事と、口径十五センチの反射望遠鏡が三十円で自作できるという付記に誘われ、以来五年間かかって望遠鏡を作った。半年かかって鏡を磨き、赤道儀とドームを設計し、田舎の畑の真中にコンクリートをこねて土台を作った。当時戦争の勃発で機械類が手に入りにくく、ドーム、赤道儀、鏡筒はもとより、歯車まで木で作ったものがあつた。私は三人の弟たちを叱咤激励してがんばった。友人は、何年たってもできない望遠鏡を“バツカスの望遠鏡は無用の長物の代名詞”とからかった。